

## 1899年から1945年までの日本における キリスト教学校の形成 中澤正七の場合(1)

Building a Christian School in Japan from 1899 to 1945;  
in the Case of Shoshichi Nakazawa (1)

楠 本 史 郎\*

### 要旨

20世紀直前から中頃にかけて、日本のキリスト教学校は大きな困難に遭遇した。とくに地方では困難が大きかった。中澤正七は北陸女学校主幹、後に校長となり、その課題と向き合った。北陸・金沢の地域性に即し、キリスト教学校の形成を図った。教育内容と施設設備の充実、また学校の自給独立に努めた結果、北陸女学校は大きく発展した。その基礎には、キリスト教学校におけるキリスト教性に対する新しい理解があった。

キーワード：中澤正七 (Shoshichi Nakazawa) / 北陸女学校 (Hokuriku Jogakko girls' School) /  
文部省訓令第12号 (the 12th instruction of the Ministry of Education in 1899)

### はじめに

20世紀初頭から中頃にかけて、日本のキリスト教学校は大きな困難に遭遇した。そのおもな要因は以下である。

①1899 (明治32) 年の文部省訓令第12号による公立および公認学校における宗教教育の禁止

②1937 (昭和12) 年～1945 (昭和20) 年の日中戦争および太平洋戦争下における軍国主義・排外主義

さらに北陸地方には、この地域に特有な次の困難があった。

③英語教育に対する関心の薄さ

④キリスト教に対する無理解

中澤正七 (1870-1944) は1902 (明治35) 年4月に北陸女学校主幹として赴任し、1920 (大正9) 年末、同校長に就任、その死まで在職した。42年以上、指導者としてこれらの課題に取り組み、北陸・金沢の地域性に即したキリスト教学校の形

成に当たった。本稿は、主幹および校長としての中澤の働きを追い、学校におけるキリスト教性をどのように理解し、そのもとに学校運営方針を立て、また施策を実行していったかを跡付ける。

### I 赴任までの時代と中澤正七の課題

1880年代、日本に一群のキリスト教学校が誕生した。その多くは、外国伝道団体 (ミッションボード) によって設立され、経営されるミッション・スクールである。背景には、1883 (明治16) 年から1887 (明治20) 年までの鹿鳴館時代に代表される欧化主義がある。幕末に欧米諸国と交わした不平等条約を改正し、富国強兵、殖産興業を実現するため、西洋文明に対する憧れが掻き立てられた。キリスト教学校を歓迎する雰囲気があった。

一方、明治政府は、天皇を中心とする中央集権的国家形成を目指し、着々と準備を重ねた。1889 (明治22) 年2月、大日本帝国憲法を發布、天皇制による近代国家建設の枠組みを作る。教育の面では、翌1890 (明治23) 年10月、「教育ニ關スル勅語」(以下、「教育勅語」) を発し、国家主義的な国民教育の基本路線を打ち出した。その主

\* KUSUMOTO, Shiro  
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科  
キリスト教概論

眼は、天皇に忠実な国民を育てることにある。それゆえこれは、自由で主体的な個人を育成するキリスト教教育とは本質的に対立する面を含んでいた。事実、翌1891(明治24)年1月9日に、内村鑑三による「不敬事件」が起こる。これに対し、同年11月、井上哲次郎が「国家と耶蘇教の衝突」を発表、1893(明治26)年4月には「教育と宗教の衝突」を著し、キリスト教学校に対する世の警戒を高めた。

1894(明治27)年ー1895(明治28)年の日清戦争に勝利し、自信を深めた政府は、長年、懸案となっていた諸外国との不平等条約の改正交渉を進める。これが実現し、1899(明治32)年7月17日より実施した。以降、外国人居留地は廃止され、外国人の旅行や居住が許されることになる(内地雑居)。明治政府は、これを機に外国ミッションボードによる国内伝道と教育活動が活発化することを恐れた。このため同月27日、内務省令第41号を發布、教会設置や伝道者の異動などを、認可を要する事項とし、キリスト教の伝道に圧力をかけた。

教育に関しては同年8月3日、私立学校令を発した<sup>1)</sup>。これは、学校の設立や校長の選任を認可要件とし、教師は「国語二通達」することを条件とし(第5条)、外国人教師の排除を目指した。また「学齡児童ニシテ未タ就学ノ義務ヲ了ラサル者ヲ入学セシムルコトヲ得ス」(第8条)とし、小学校教育への私立学校の参入を阻んだ。このため、1886(明治19)年に設立された英和小学校は、後に英和学校となるが、生徒を得られず、結局1903(明治36)年に廃校となる。

さらに同日、文部省は訓令第12号<sup>2)</sup>を發布した。これは、公立学校はもちろん、公認の私立学校でも宗教教育や宗教儀式(礼拝)を禁止した<sup>3)</sup>。そのため、キリスト教学校は、宗教教育を捨てるのか、あるいは公認学校の地位を離れ、上級学校への入学試験受験資格と男子校における徴兵猶予の特典を捨て、各種学校となってでも宗教教育を守るのか、という選択を迫られた。これは宗教教育を排除しようとした政策であり、キリスト教学校に大きな試練をもたらした。その結果、1883(明治16)年に設立された愛真学校は、すでに公立中学校の整備によって生徒減少に見舞われ、北

陸英和学校、さらに北陸学校と名称変更していたが、訓令第12号による宗教教育禁止が決定打となり、1899(明治32)年8月、閉校を余儀なくされた。

金沢女学校は、公認学校の地位を離れ、宗教教育を守ることを決断する。学校名も1900(明治33)年に北陸女学校と変え、名実ともに、ミッションボードの支えによる各種学校、つまり米国長老教会の伝道団体が経営するミッション・スクールとして歩むことになる<sup>4)</sup>。これは第6代校長ケート・ショーの決断であった。

しかし地方学校にとって、キリスト教と英語教育のみを掲げ、女子中等教育を貫くことは困難であり、経営上、不利だった。とくに北陸地方は伝統的仏教、とりわけ浄土真宗が深く根付き、キリスト教への無理解や偏見が根強い。また横浜や神戸などとは異なり、諸外国との交流もなく、英語を学ぶ必然性は決して高くない。事実、生徒は多くは集まらず、経営は困難に見舞われる。表1によれば、金沢女学校が開校した1885(明治18)年度に38名の生徒を迎えたが、中澤が主幹として赴任した1902(明治35)年度も予備科3名を加えてなお生徒数31に過ぎない。この間18年で平均在校生数は36である。最大でも47名、最少は1894(明治27)年度で、予備科7名を加えても総数19名に過ぎなかった。こうした状況のなかで中澤正七を主幹として迎えることになる。わずか31名の在校生の学校を、建学の精神であるキリスト教を守りつつ、どう発展させ、北陸の地に定着させるのか、中澤に負わされた課題は重かった。

## Ⅱ 中澤正七の生涯と北陸女学校経営方針

### 1. 経歴

中澤正七は1870(明治3)年1月7日<sup>5)</sup>、島田正七として高知県に生まれ、後に中澤家の養子となった。1888(明治21)年9月、明治学院普通部に入学、翌年3月に受洗し、キリスト者となった<sup>6)</sup>。1890(明治23)年7月、20歳で退学、東京専門学校に移籍する。1893(明治26)年7月15日に同・文学科を卒業し、同年9月、明治学院神学部に入學した。1896(明治29)年3月に卒業した後、3年間、日本基督教会一番町教会で、同教会牧師で

日本基督教会の指導者、植村正久の許、教師補として務める<sup>7)</sup>。植村の主宰する「福音新報」の編纂にも当たった。長老制教会の伝統のなかで伝道者となることを志していた。

しかし1899（明治32）年3月で同教会を辞し、4月より茨城県立土浦中学校に英語教師として勤務、3年間の教育経験を積む<sup>8)</sup>。

## 2. 主幹として

その中澤を、日本基督教会金沢教会牧師の毛利官治と、石川県立師範学校教諭の島崎恒五郎<sup>9)</sup>が、北陸女学校の主幹として招いた。中澤はキリスト教界に復帰を望み、1902（明治35）年4月、金沢に赴任した。

北陸女学校主幹としての中澤の当初の任務は、①外国人校長の補佐、②教務庶務に関する実務、③月曜講話の担当、④英語読解と地理歴史の授業担当だった<sup>10)</sup>。実際には学校の管理運営全般を負った。

中澤赴任当時の第6代校長で、外国人校長としては初代のケート・ショーは、同年8月、米国へ帰国した。わずか1年間の在任であった。同年9月にアイダ・リベカ・ルーサーが第7代校長に就任<sup>11)</sup>、1909（明治42）年まで7年間、務める。第8代校長ジャネット・ジョンストンは1909（明治42）年9月から1914（大正3）年8月まで5年間、さらに第9代校長にはルーサーが再任され、1920（大正9）年9月まで6年間、務めた。19年間で延べ4名の外国人が校長となった。平均在任期間は5年に満たない。学校の継続性は、中澤が18年半、主幹として4代3名の外国人校長に仕えることによって守られた。

「中澤は…、明治三十五年四月に本校主幹として着任以来、約十八年間のたゆまざる奉仕と厚い信仰とにより職員生徒は勿論の事、多くの卒業生から、慈父の如く慕われ、又外人教師からも厚い信任を受け、事実上の本校の指導者であった」と評価されている<sup>12)</sup>。

## 3. 校長に

ルーサーの辞任後、1920（大正9）年11月2日の理事会決定により、中澤が第10代北陸女学校校長に就任する。当日、直ちに教職員・生徒全員と同窓会や理事が集まり、新校長歓迎会を開いた<sup>13)</sup>。全校から信頼されていたことが分かる。その

後、1944（昭和19）年11月12日に74歳で召されるまで、24年間、北陸女学校校長であり続け、学校の発展に大きく貢献した。

戦後、赤井米吉は、1952年に完成したばかりの小立野・北陸学院高等学校の新校舎を前に、次のように記している<sup>14)</sup>。

「そのかげに前前校長中沢正七先生の四十年の献身の功のあった事を忘れてはならない。…中沢先生が北陸へ来られたころの女生徒の数は一学級十数名という少いものであった。…それが先生の晩年には戦時中でも三学級もの生徒を収容するような大きなものになった。…先生がその間陰蜜に堅忍をかさね黙黙として経営につとめられたものであった。」

主幹として18年半、校長として24年、合わせて42年半、地方にあるキリスト教学校を支え、指導し、発展させた。

## 4. 課題と働きの概要

中澤は、主幹として外国人校長を助けつつ、学校の基礎を築いた。赴任した20世紀初頭の北陸地方にあっては、教会は力が弱く、学校を支えることができなかった。外国伝道団体の支えが不可欠であった。また北陸女学校は公認学校の資格を失い、北陸地方ではキリスト教教育は評価されず、英語教育の必要性も認識されていなかった。中澤が赴任した1902（明治35）年度の在校生はわずか31名に過ぎない。中澤は、北陸に根付く学校を形成しようと努めた。その努力が報われ、主幹としての最後の1920（大正9）年度には、213名の在校生を数えている（表1）。

校長としては、学校経営の重荷を負った。当時、キリスト教学校にとって逆風が吹き荒れた。1923（大正12）年9月1日に関東大震災が起こり、日本全体に暗い影が落ちる。経済は大きく停滞した。さらに1929（昭和4）年の世界恐慌は日本を侵略的な帝国主義に駆り立てる。1931（昭和6）年の満州事変、1937（昭和12）年の盧溝橋事件に始まる日中戦争は、1941（昭和16）年12月の太平洋戦争へと拡大し、1945（昭和20）年8月15日の敗戦に終わることになる。教育界では、1933（昭和8）年に長野教員「赤化事件」を機に、翌年文部省に思想局が設置され、思想統制が厳しくなる。日本は、軍縮や「満州国」問題で英米各

表1 生徒数の推移 (a)

主の年	年度 元号	在 学 生 徒 数				卒業 者数	備 考
		予備科	本 科	家政科	補習科		
1885	明治18		38			38	金沢女学校開校 校長:里見鉞→青木仲英
1886	明治19		52			52	英和幼稚園・英和小学校開校
1887	明治20		47			47	修身科に旧新約聖書使用を明記
1888	明治21		45			45	
1889	明治22		44			44	第3代校長:戸田忠厚
1890	明治23		47			47	4 ウィン寄付の講堂完成
1891	明治24		47			47	9 ヘッセル帰米
1892	明治25		46			46	11
1893	明治26		29			29	8 ヘッセル再来朝。第4代校長:水芦幾次郎
1894	明治27	7	12			19	4 予科2年を設置
1895	明治28	9	14			23	2 ヘッセル再帰米・死去 第5代校長:三野季暢
1896	明治29	13	23			36	3 (b)
1897	明治30	11	21			32	2
1898	明治31	4	23			27	2
1899	明治32		24			24	2 私立学校令・訓令第12号 北陸英和学校閉鎖
1900	明治33	3	30			33	3 北陸女学校
1901	明治34	5	23			28	5 第6代校長:K.ショー
1902	明治35	3	28			31	1 中澤 主幹に就任 第7代校長:I.R.ルーサー
1903	明治36	12	55			67	3 予科を1年に 英和学校廃校 友愛会設立
1904	明治37	6	86		6	98	5 補習科設置 校友会発会 2寮体制へ
1905	明治38	16	130		3	149	4 音楽講習科設置 同窓会報1号 創立20周年
1906	明治39		142		5	147	10
1907	明治40		130		4	134	16
1908	明治41		96			96	19
1909	明治42		74		2	76	27 第8代校長:J.M.ジョンストン
1910	明治43		56		7	63	29 創立25周年
1911	明治44		55		9	64	15
1912	明治45		66		2	68	7 4年制指定校に 北陸女学校附属幼稚園に
1913	大正2		74		8	82	13
1914	大正3		71		3	74	15 第9代校長:I.R.ルーサー再任 第1回理事会
1915	大正4		99			99	11 創立30周年
1916	大正5		96	5	2	103	15
1917	大正6		115	21	5	141	21
1918	大正7		123	33	4	160	18
1919	大正8		136	48	10	194	31
1920	大正9		158	46	9	213	36 中澤 第10代校長に就任
1921	大正10		177	71	9	257	42
1922	大正11		242	55	17	314	41 校舎増改築 5年制へ移行
1923	大正12		281	29	13	323	70 関東大震災
1924	大正13		350		11	361	77
1925	大正14 (c)		344		8	352	60 創立40周年
1926	大正15 (c)		395		8	403	8 新校舎竣工 創立40周年記念事業
1927	昭和2		367			367	64
1928	昭和3		381			381	70
1929	昭和4		352		4	356	63 補習科を専攻科に
1930	昭和5		339		4	343	64
1931	昭和6		289		9	298	79 5年制指定校
1932	昭和7		261		12	273	75
1933	昭和8		259		13	272	81
1934	昭和9		306		4	310	48
1935	昭和10		306		7	313	51 創立50周年
1936	昭和11 (d)		305		7	312	47 財団法人化
1937	昭和12						71
1938	昭和13						71 鼓笛隊結成
1939	昭和14 (e)					505	55 第1回興亜奉公日 第1回教練
1940	昭和15						74 紀元2600年記念
1941	昭和16						91 宣教師社団より飛梅校地を寄付される
1942	昭和17 (f)					830	134 英語を随意科目に 教室棟増築
1943	昭和18 (g)		842			848	126 附設科
1944	昭和19 (h)		735		158	893	157 舞鶴挺身隊 勤労働員 11月,中澤召天
1945	昭和20 (i)		801		125	926	第11代校長:角田陽六

- (a) 1885(明治18)年度～1936(昭和11)年度は『五十年史』p.390-391による  
 (b) 『百年史』p.64の統計表では1896(明治29)年が予科13、本科13の計26名となっている。本表は『五十年史』に従った。  
 (c) 『八十年史』p.110-111には1926(大正15)年までの統計が掲載されているが、1925(大正14)年と1926(大正15)年度の数字が異なっている。本表は『五十年史』に従った。  
 (d) 1936(昭和11)年度～1944(昭和19)年度の卒業生数は、1986年発行の北陸学院同窓会「会員名簿」による。梅染信夫氏の調査による。  
 (e) 『八十年史』p.194による  
 (f) 『百年史』p.360による  
 (g) 『八十年史』p.217による。1944(昭和19)年1月現在の生徒数。但し『八十年史』の統計は、第1～第5学年の生徒数を合計すると842名となるが、計848名としている。  
 (h) 『百年史』p.396による。1944(昭和19)年度の生徒数統計は、第1学年～第4学年となっており、第5学年の記載がない。それに代わり「附設科」158名となっている。この年度から、5年制を4年制へ変更し、従来の第5学年を附設科としたと考えられる。そこで本表では、本年度の「本科」には第1～4学年の生徒総数735を入れ、「附設科」158名は表中の「専攻科」の欄に記した。『八十年史』p.217は、「推察するに(昭和)二十年四月から四年制になって、希望者を入れて附設科を設けたのであろう。…他の市内の学校も終戦当時は皆四年制であった」(括弧は筆者)としている。実際には、4年制への移行は、前年の1944(昭和19)年度に行われたと推測される。  
 (i) 『百年史』p.396による。1945(昭和20)年度の「本科」には第1～4学年の生徒総数801を入れ、「附設科」125名は表中の「専攻科」の欄に記した。また、卒業生数331は、4年制卒業生174名と5年制卒業生157名の合計人数である。但し、『八十年史』p.218は、1945(昭和20)年度の生徒数を、第1～4学年818名、附設科111名としている。

国と対立を深め、国内のキリスト教学校への警戒を強める。そのなかでどう学校を守り、導いていくかが、北陸女学校校長としての中澤の重荷であった。

困難のなかで、中澤はさまざまな施策を行った。校舎増築や施設拡充を行うとともに、4年制教育内容の整備とその結果としての文部大臣による指定、5年制への移行とその文部大臣指定など、教育内容の充実に努めた。一方では、北陸女学校を財団法人化し、自給独立の学校を目指す。その結果、生徒数は毎年増加していった。創立40周年の翌1926(大正15)年度には403名と初めて400名を越え、さらに1939(昭和14)年度は505名、中澤が召天した1944(昭和19)年度は893名、翌1945(昭和20)年度に926名を数えるまでになる(表1)。

この一連の働きのなかで、中澤は数々の著書や訳書を出し、編纂にも取り組んでいる。その著作、訳書、編纂、関連書および関連記事を表2にあげる。またさまざまな遺稿、日誌、資料が残され、表3にあげた。その他に、ほぼ毎年発行された北陸女学校同窓会「会報」(以下、「会報」)に原稿を寄せている。これらが、『北陸五十年史』(以下、「五十年史」)、『北陸学院八十年史』(以下、「八十年史」)、『北陸学院百年史』(以下、「百年史」)などの学院史とともに、本稿の主要な資料となる。

## 5. 中澤の基本方針

地方におけるキリスト教学校の形成を、中澤はどのような見取り図によって進めようとしたのか。1925(大正14)年7月23日発行の北陸女学校同窓会「会報」17号(創立四十周年記念号)冒頭の論説「創立四十周年を迎えて」の中に、中澤が思い描いた学校形成に関する基本方針を見ることができる。その中で中澤はまず、創立者メリー・ヘッセルが40年前に多くの困難を冒して金沢女学校を開校したこと、地域社会の無理解に抗して生徒たちが入学したこと、なおこれまでの40年間は全校生徒が20名にも至らない苦勞を舐めつつ、米国伝道会社の好意ある補助と、創立者の志を継いで太平洋を渡った外国人女性教師たちの献身的な奉仕によって支えられてきたことに、感謝をもって言及する。その上で、今後の方針をおもに3点、挙げている。

(1) キリスト教精神の継承と発展 「本校は地方人の要求に応じて成立ったものでなく、却て地方人の敬遠せる基督教教育を標榜し、地方人の左程歓迎しない英語を主要学科として教育せんとするのであるから、他の公私学校とその設立の趣旨、存在の意義を異にするも亦已むをえない次第である。従って本校は如何なる犠牲を拂っても、創立者の精神を継承し、厭くまでも之を發揚せねばならぬ<sup>15)</sup>。創立者メリー・ヘッセルの精神とは、キリスト教信仰であり、ヘッセルの愛した詩編111:10の「主を畏れることは知恵の初め」という聖書の言葉に他ならない。中澤は、それを失

表2 中澤正七著作・訳書、編纂、関連書・記事

	書名	発行、出版年	史料番号	備考
著	「鎌倉期厭世詩人の理想 西行法師と鴨長明」	1893年	5621	東京専門学校文学科 卒業論文
	「犠牲」	不明	5622	北陸女学校・クリスマス 対話シナリオ
作	『日本の使徒 トマス・ウケン伝』	長崎書店,1932年		トマス・ウケン宣教師の生涯 を描いた伝記
	『長尾巻物語：歓喜の聖徒』	一粒社,1936年		北陸出身の伝道者、 長尾巻の生涯
	「荊棘の旅」	宗教教育調査 委員会,1937年	5616	『宗教文学読本2』に所収。 ウケン夫妻の金沢への旅行
訳書	カーネギー・シンプソン著 『人生の事実』	日本基督教興文 協会,1916年	5617	恩師・柏井園の校補 『八十年史』p.50-51
編纂	『金澤日本基督教会 五十年史』	1930年		
追悼	『おもかげ 校長 中澤正七先生』	北陸学院同窓会	2479	
記事	赤井米吉 「中澤正七先生」	北陸新聞,1952年 11月9日記事		

1)「資料番号」は、北陸学院における北陸学院歴史資料の整理番号

表3 中澤正七遺稿・日誌・資料・蔵書

名称	年月日	主な内容・備考	史料番号
覚書No.1	1924.5.~1928.2.	幼稚園母の会、金沢教会、同窓会、終業式、始業式 等での説教・奨励、校長協議会記録など	5625
備忘録	1928.3.~1930.4.	母の会、野町教会、寄宿舎、女子青年団、金沢教会、 富山教会、父兄懇談会等での説教・奨励	5624
覚書No.2	1930.12.~1932.2.	始業式、修身科、野町幼稚園母の会、専攻科、 殿町教会、初週祈禱会等での授業・奨励	5626
覚書No.3	1931.10.~1934.4.	ウイン記念礼拝、殿町教会、学校礼拝、母の会、始業 式、入学式、後援会総会、金沢教会	5627
覚書No.4	1935.7.~1936.2.	殿町教会、金沢教会、高岡教会、小学校長招待会席、 卒業礼拝、小松教会、終業・始業式	5628
講話集	1929年	始業式、小松町等での奨励	7346
講話集	1910.9.4~ 1918.11.3	金沢教会、メソジスト金沢教会、北陸幼稚園教師 大会での礼拝説教15編	深谷松男 氏寄贈
講話集No.2	1918.12.18~ 1922.10.1	金沢教会、殿町教会、市ヶ谷教会、野町教会、 夏期修養会での礼拝説教26編、2編欠損	同上 5631
講話集No.3	1938.4.8~ 1939.2.8	入学式、始業式、母の会聖書研究会、講堂礼拝、 金沢教会、教育勅語奉読式、明治節、元旦式辞	5632
講話集No.4	1939.11.~ 1941.12.	講堂礼拝、金沢教会、母の会、終業・始業式、愛光会、 紀元節、臨海・林間生活、朝礼式	5633
説教資料	1916~1917	新聞切抜他。「基督者と坂本竜馬」、「基督教世界観」、 「無信仰の悲惨」、「豚の角煮」など	5629
説教資料	1941.8~1944.11	講演メモ、雑誌・新聞書写、放送要約など	5634
小遣い帳	1944.1.5~11.7	くま子夫人葬儀会計を含む	5618
教科書写	1891年9月	大西祝「心理学」口述を中澤が筆記	5620
蔵書	1890年	エドワード・ドーデン著『シェイクスピア』	5619
講演記録	1936.4.3	賀川豊彦講演「長尾巻に学ぶ」	5623
讚美歌集	1941.1		7331
学校日誌	1941.1.1~ 1942.12.30	1941.2.13ライザー・ウィルソン送別会、12.8校訓発表、 1942.5.大阪・神戸・関東同窓会出席	7515
学校日誌	1943.1.1~ 12.27	2.5巡察官レコード調査・1年生3名餅持参で訓戒、 2.22スキー、3.13喫茶店入店で5年生3名訓戒、 7.15処分言渡し5名、10.22行軍訓練	7516
学校日誌	1944.1.1~ 11.10	2.17住宅地寄附契約解消、3.30入学志願者458名、 7.1植林地除草・新運び、19宮城遷移、9.1無期停学 1名、~11.10	7517
個人日誌	1943.1.1~ 1944.6.7	1.26足痛、2.14腹痛、7.17くま子夫人病状(以後続く)、 9.7軍服ボタン掛奉仕、11.10白山神社参拝、12.14女学生 挺身隊舞鶴へ、44.1.4女学校別館へ転居、2.11次男道也 也応召、3.31くま子召天、4.2葬式、5.1~四国へ埋葬	5614
個人日誌	1944.6.8~ 11.9	5.11市内教会連合礼拝、7月食料記載続く、7.27次男 道也戦死通知、10.28教費で合同葬、~11.9	5615

ったなら本校の存在の意義はないと言い切っている。

(2) 内容の充実 さらに中澤は、1925（大正14）年、福岡の西南学院で開催された基督教教育同盟会第14回総会で明らかにされた「基督教学校将来の学校政策」に関する調査委員会の報告をもとに、キリスト教精神発展の具体策を述べる。キリスト教学校の不利を補うため、「設備及び教授法に於て最新式たるを要す」<sup>16)</sup>と強調する。教育内容とともに、施設・設備を整え、充実させることを目標として掲げる。

(3) 独立の計画 「来るべき十ヶ年間の計をたて、成し得べくは経営機関も財政も独立し得る基礎を作らねばならぬ」<sup>16)</sup>。続いて、ミッション・スクールという名称を退ける。「吾等の学校はミッション・スクールと呼ぶよりも寧ろ基督教学校と称ふるを適当とす」<sup>16)</sup>。そのため、学校経営をミッションボードから独立させ、自立を目指し、①基本金の創設と、②卒業生と有志を維持員とし、寄付を募る必要性を指摘している。

以上が、18年半の主幹時代と5年の校長経験から生み出された、中澤の学校運営基本方針である。以下では、この3点を中心に、中澤による北陸女学校形成を跡付ける。

### Ⅲ 中澤の基本方針 (1) キリスト教性の継承と発展

#### 1. 課題

1899（明治32）年の文部省訓令第12号は、キリスト教学校に大きな衝撃を与えた。これは、官公立ならびに公認学校における宗教教育を禁じた。教育課程において聖書を教えることはもちろん、課程外で学校礼拝を行なうことも許されない。このため金沢女学校は、多くのキリスト教学校とともに、公認学校の地位を捨て、各種学校としてキリスト教教育と学校礼拝を守る道を選ぶ。これは、上級学校への進学資格を失うことを意味していた。その後1901（明治34）年に、男子校では徴兵猶予および上級学校進学資格が認められる。しかし女学校については依然として、1899（明治32）年2月7日に公布された高等女学校令により、進学資格取得は困難であった。キリスト教女学校は、そのキリスト教教育のゆえに高等女学

校と認められず、不利な状態に置かれ続けた。1935（昭和10）年11月28日、文部次官通牒「宗教的情操ノ涵養ニ関スル留意事項」は、1899年の訓令第12号の趣旨は宗教的情操の涵養を妨げるものではないとし、制限の緩和を図った。しかしこれは一つの解釈に過ぎない。訓令第12号そのものの廃止は、太平洋戦争敗戦後の1945（昭和20）年の文部省訓令第8号まで待たなければならなかった。

こうしたキリスト教教育に対する厳しい状況のなかで、中澤は北陸女学校のキリスト教性をどう捉え、継承・発展させ、実践したのか。

#### 2. 信仰と教育に対する理解

中澤は、北陸女学校におけるキリスト教教育の重要性を確認し、その意義を説く一方で、学校におけるキリスト教教育と個人の信仰的決断とを区別する。

1) 「本校教育の主義方針」 1914（大正3）年6月1日に行った講堂講話<sup>17)</sup>のなかで、中澤は北陸女学校の主義方針を明らかにした。まず「女子と英語」について論じ、英語を学ぶことは必ずしもその志を持たずに入学した者にとっても重要であると言う。語学能力を身に着けるだけでなく、英語を学ぶことによって「英米の堅実な気風に触れ、世界人類に対する博い同情心が養われ、生徒の人格を向上させる事少なくない」。

同様に「聖書と教育」を論じ、本校では「万事基督教主義で教育を施している」と記す。「聖書が生徒の人格を養うに最も必要なものであると信じている。之を取去れば本校の生命はなくなる」と断言する。毎朝、学校で行われる礼拝は神への日々の挨拶であり、これにより人格は引き上げられる。聖書は精神を養う糧であり、進むべき道を示す磁針である。「子女の教育にこの信仰の涵養は肝要である」。

その上で、「さりながら、本校は寄宿舎の生徒は別として生徒に教会に出席せよ、受洗せよとは言わぬ」と言う。受洗はあくまでも本人の意志による。聖書の人格形成力を重視し、キリスト教教育を行うとともに、基本的に信仰と教育を区別している。

こうしたキリスト教教育により、「訳の解る女」、「家庭に役立つ人」、「何所までも頼みになる

女)、そして「恐るべき事を恐るる人」となることを目指すという。

2) 校長就任挨拶 中澤は1920(大正9)年11月2日に北陸女学校校長に就任した。当日行われた歓迎会での挨拶で、校長就任を祝うために集まった職員生徒、同窓会会員に感謝を述べた後、「本校は何処までも創立当時の精神を擁護し之を発揚するように努めねばなりません<sup>18)</sup>」と強調している。

但し「其形式に至りては時代に応じて変化しませう」とし、その例として、かつて多かった英語と聖書の時間を減らす、4年制から5年制への移行を検討する、またバザーや公開講演会といった社会貢献を行うことなどを挙げている<sup>18)</sup>。建学の精神に堅く立ちつつ、その表出は時代の変化に合わせ、柔軟に行うべきだと述べている。

3) 「私学の特徴と本校の計画」<sup>19)</sup> 1927(昭和2)年12月発行の「会報」19号冒頭のこの論説で、中澤は私学を①官公立の補完型、②教育者個人の理想追求型、③宗教校の3種に分類する。その第3の類型に属すキリスト教学校が、我が国女子教育の先駆的役割を果たし、現在、その卒業生が指導者として、また健全な家庭人として社会に貢献していると指摘する。私学としての本校の精神が大きな教育的効果をあげる可能性に言及し、これを強調する。「従って吾らは本校の伝統的精神を尊重し之を擁護する任務の重大なることを覚ゆる」<sup>20)</sup>とする。

同時に「本校職員生徒の信仰は素より自由であって、何宗を信じるも、また何等信仰なきも差し支へないが、少なくとも本校の精神を理解し、その方針に対して寛容なる態度をとるべきは当然である」<sup>20)</sup>。学校の基本精神を守りつつ、構成員に対して広く寛容な思いを述べている。

従ってキリスト教学校としての本校の実際の特徴は、毎朝15分の礼拝と、修身科に教科書とともに聖書を用いること、さらに日曜日の運動競技には参加しないことなどがあるにすぎないが、それを守ることが重要であると語っている。

4) 創立五十周年記念式典における式辞<sup>21)</sup> 北陸女学校は1935(昭和10)年10月16日、創立五十周年を迎え、記念式典を行った。その式辞で、中澤は金沢女学校開校式で創立者ヘッセルが

語った「幼児を養育する婦人は世界を支配す」という言葉を引き、本校がキリスト教主義に基づき、女子教育の重要性を一貫して認識し、その推進のために努力してきたことを強調する。

それを受け、「本校教育の方針としましては、教育勅語の御精神を奉体するは申す迄もなく、基督教主義によりて宗教々育を施し、敬虔にして明朗、儉素にして周密なる徳性を養成するに努め」と述べている。「基督教主義によりて宗教々育を施し」と、学校の基本精神を明示した。これは、2年後に設立される財団法人北陸女学校の寄附行為第1条へとつながることになる。当時、1931年の満州事変以来、軍国主義が台頭していた。思想統制が強まりつつあった。1933(昭和8)年の国際連盟脱退、翌年末のワシントン軍縮条約破棄と続き、国家主義・排外主義が高まっていた。その中でキリスト教主義を掲げることは、時代に抗して学校の立場を明瞭にする行為であったといえる<sup>22)</sup>。

中澤は、一貫して信仰と教育を区別し、キリスト教学校の教育の質を確保、向上させつつ、なお、時代に応じた新しい形で建学の精神を守ろうとしたとすることができる。

### 3. キリスト教学校の形成

上述の中澤の姿勢は、外国ミッションボードによるミッション・スクールを脱し、日本に根ざした自給独立の新しいキリスト教学校を形成する方向へと進んでいく。

前出の「創立四十周年を迎えて」(「会報」17号)では、「基督教主義学校将来の学校政策」に関する調査委員会の報告を引用し、この方向性を打ち出した。そこでは、ミッション・スクールという名称が与える危険を指摘している。

誤解を受ける危険、「その一は信者を作ること为首要の目的とし、教育は単に方便と思はれる事」<sup>23)</sup>である。中澤にとってキリスト教学校は、キリスト教により個人の人格を高めるために最良の教育を行なうべきである。そこでの教育活動は、伝道方策の一つ、あるいはたんなる手段であってはならない。

危険、「その二は外国人に属し彼等に支配せられ外国の利益のために建てられありと思はれる事」<sup>23)</sup>である。日本のキリスト教学校は外国支配



の手先であってはならない。日本人が主体となって担われなければならない。このことは、戦争への道を歩み始め、排外主義に陥りやすい時代の、しかもキリスト教への偏見の強い北陸地方にあっては、とくに重視されるべきであった。

#### 4. 金沢女学校・北陸女学校におけるキリスト教教育の発展

中澤の掲げたこうした方針は、金沢女学校創立当時のキリスト教教育観と、どのような関連を持つのか。建学の精神はどう継承されたのか。あるいは変更されたのか。

創立者ヘッセルが金沢女学校設立を石川県令に願ひ、認可を得た1885（明治18）年3月21日付の金沢女学校教則第1項は「生徒教養の目的 道徳を本とし普通学を授け善良有益なる女子を養成するを目的とす」<sup>24)</sup>となっている。そこには、キリスト教教育は明記されていない。「禁教の高札こそ撤去されてはいたが、切支丹制禁(ママ)の太政官布告はまだ生きていた時代であったから、致し方もないことであった」<sup>25)</sup>。

しかし「道徳を本とし」という表現には、創立者ヘッセルが学校設立の理念とした「主を畏れることは知恵の初め」という詩編111:10の言葉が反映されていると思われる。また「善良有益なる女子を養成する」との目的は、創立者にとって、ただキリスト教教育のみによって達成されることであった。

事実、1887（明治20）年8月に認可された改正規則に付された課程表<sup>26)</sup>では、予備科を含む全学年の修身教科書として『新約聖書』、『旧約聖書』が挙げられている。この年、旧約の日本語訳が完成したばかりであった。これを、早速、教科書に採用した。但しこの点については、1893（明治26）年12月25日付で石川県より、聖書を修身の教科書として用いることを禁じる通達が出されている。

さらに1897（明治30）年に制定された金沢女学校同窓会規則第2款は、「本会ノ目的ハ卒業生各自ノ関係ヲ親密ナラシメ且ツ基督教的教育ニ重キヲモタシムルニアリ」<sup>27)</sup>（傍点、筆者）となっている。県の認可の必要な教則および校則には、キリスト教に基づく教育を謳うことはできなかったが、認可の必要のない諸規則には学校の基本的

な立場を鮮明に打ち出した<sup>28)</sup>。

しかし1900（明治33）年4月1日に北陸女学校と改称した当時の学則の第1条は、「本校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ授クル所トス」<sup>29)</sup>となっている。金沢女学校教則第1項を全面的に変更したように見える。しかし実はこれは、高等女学校令における「教育の目的」の条文（第1条）を、ほぼそのまま写したものにすぎない。同令第1条は、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス」となっていた。これを北陸女学校学則に、機械的に援用した。キリスト教教育を守るためにあえて公認学校の地位を離れ、校名改称まで行った北陸女学校であったが、認可を必要とする学則の上では、国による教育統制の大きなうねりには抗しきれなかったと言ふべきかもしれない。しかし他方ではむしろ、公立など一般の高等女学校に並ぶ高い水準の教育内容を目指し、日本の学校制度への適合を図ろうとしたとも考えられる。

このような時代の奔流の中に主幹として赴任した中澤正七は、1937（昭和12）年の財団法人設立まで、35年間にわたり、あえて校則にキリスト教の文言を入れて無用の混乱を引き起こすことを避けた。他方、金沢女学校時代から続く高度な英語教育とともに、礼拝や聖書の教育を受け継ぎ、実質的にキリスト教性を維持、発展させようとした。毎朝の学校礼拝や入学式、卒業式、始業式、終業式などでは、聖書に基づき、よく準備された奨励を行った。その膨大な原稿が残されている（表3の「覚書」、「備忘録」、「講話集」）。

こうした努力の成果が、1937（昭和12）年1月12日の財団法人北陸女学校の認可となって実ることになる。その寄附行為第1条は「本法人ハ教育ニ関スル勅語ノ御趣旨ニ基キ基督教ノ主義ニ抛リ女子ニ教育ヲ施スヲ以テ目的トス」<sup>30)</sup>となっている。「基督教ノ主義ニ抛リ」との文言が金沢女学校創立以来、初めて明文化された。すでにその前年、保護者などへの学校説明のために作成された「教育の要旨」では、「教育の目的」として「本校ハ教育勅語並に諸詔書の御趣旨に適ひ、基督教的信念に基き、家庭及び国家社会の建設進展に貢献すべき、品性と教養とを具ふる女子を養成するを以て目的とします」（傍点、筆者）<sup>31)</sup>を掲

げていた。また「生徒心得」の「訓練要旨」第1項も「教育勅語及び諸詔書ノ御趣旨ニ適ヒ基督教ノ信念ニ基キ女子トシテノ品性ヲ備ヘシムルコト」(傍点、筆者)<sup>32)</sup>と定めている。

キリスト教学校形成にとって困難な時代と地域にあって、中澤は十分に時間をかけ、周到な準備を重ねて、本校の建学の精神を受け継ぎ、高めていった。

## 5. 小結

北陸女学校における中澤正七の働きについて、キリスト教性の保持の点から、次のように言うことができる。

(1) 中澤は金沢女学校設立以来の創立者の志を理解し、それを受け継いだ。校則にキリスト教教育を明記することが許されなかった先人たちの思いを学校運営のなかで継承し、35年をかけて財団法人寄附行為の中に、学校の根本精神を明確に表現した。

(2) 同時に、宣教の手段としてのミッション・スクールの段階から、日本に定着し、独立したキリスト教学校へと、教育の質を高めるとともに、経営の上でも多くの生徒を得、キリスト教に触れさせる結果を生み出した。

### 「日本のキリスト教学校の形成 中澤正七の場合 (1)」への結び

中澤正七は、教会と学校、信仰と教育を明確に区別し、各々の役割と、相互の関係を問い直し、明確にした。伝道の手段としての学校教育から、キリスト教精神によって人格を高めつつ質の高い教育を行うキリスト教学校への転換を目指した。そのために、校地や校舎、施設を確保し、また外国ミッションボードからの独立を図った。そこでは、学校のキリスト教性が弱められたのではない。北陸女学校の教育が地域で認められ、評価されるとともに、入学者は増加し続けた。多くの生徒がキリスト教教育によって養われ、聖書に触れる。その結果、生徒や教職員、同窓生の中から教会の礼拝に出席し、受洗に至る者が現れる。こうして中澤は、北陸女学校での働きをとおして、地域諸教会の伝道を支えた<sup>33)</sup>。

こうした中澤の働きは、21世紀初頭、今日のキリスト教学校の形成に当たっても、重要な示唆

を与える。現在、園児・児童・生徒・学生の減少にともない、私立学校の経営は困難に直面している。これに加え、キリスト教学校では、キリスト者教職員の減少、理事および理事長・学長・学部長・校長・副校長・教頭等、学校指導者のキリスト者要件、いわゆるクリスチャン・コードの緩和、学校礼拝やキリスト教関連科目の位置づけの変更、地域諸教会との関係の疎遠化などが、現実には生じている。キリスト教学校におけるキリスト教性が問われている。そのなかでどのように学校として教育の質を高めつつ、キリスト教による建学の精神を守り、展開していくかが、キリスト教学校の将来を決める重要な鍵となる。

中澤が在任した42年半は、金沢女学校に始まり、北陸女学校、北陸学院へと続く128年の歴史のなかでも、もっとも厳しい時代だった。1899年の文部省訓令第12号によるキリスト教教育の危機に始まり、1945年の敗戦へと至る戦時下の排外主義がキリスト教学校を襲った。さらに北陸地方においてとくに強いキリスト教への無理解と英語教育への無関心が、北陸女学校を包囲していた。中澤は、この状況と対峙しながら、粘り強くキリスト教精神を守り、学校を発展させる基本方針を緻密に練った。教職員、同窓生と一体となり、時間と労力を注ぎながら、教育内容の充実と学校の自給独立化へと向け、方策を練り、定めて実行していった。次は、その具体的な働きを確認し、また戦時下における国家に対する姿勢を見ることになる。中澤の時代と同様、今日の状況の厳しさが、キリスト教学校のキリスト教性を問い直し、高め、新たな学校の展開を産み出すことは十分、可能であろう。

<注>

1) 私立学校令でとくに問題となるのは、第5条および第8条である。

「第五条 私立学校ノ教員ハ相当学校ノ教員免許状ヲ有スル者ヲ除ク外其ノ学力及国語ニ通達スルコトヲ証明シ小学校、盲啞学校及小学校ニ類スル各種学校ノ教員ニ在リテハ地方長官其ノ他ニ在リテハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ専ラ外国語、専門学科又ハ特種ノ技術ヲ教授スル教員及専ラ外国人ヲ入学セシムル為ニ設立シタル学校ノ教員ハ国語ニ通達スルコ

トヲ証明スルコトヲ要セス前項ノ認可ハ当該学校在職間有効ノモノトス

第八条 私立学校ニ於テハ公立学校ニ代用スル私立小学校ヲ除ク外学齡児童ニシテ未タ就学ノ義務ヲ了ラサル者ヲ入学セシムルコトヲ得ス但シ小学校令第二十一条及第二十二条ニ依リ市町村長ノ許可ヲ受ケタル児童ヲ入学セシムルハ此ノ限ニ在ラス

- 2) 「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最モ必要トス、依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規程アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許サザルヘシ」
- 3) 北陸女学校の前身、金沢女学校に対してはすでに1896（明治29）年12月25日付で石川県知事より、聖書を教科書として使用することを禁じる通達が出されていた。しかしこれはまだ、学校教科書の規制に留まっていた。実際には、副読本ないし参考書として聖書を授業で用いることは可能だった（『百年史』p.63）。しかし1899（明治32）年8月3日の文部省訓令第12号は、学校内で聖書を用いることを全面的に封じた。
- 4) 金沢女学校から北陸女学校への名称変更について、1900（明治33）年3月24日に提出された校名改称届書には、「都合ニ依リ」とあるにすぎない。

『北陸学院八十年史』p.39以下（以下、『八十年史』）は次の諸点を挙げている。①20世紀に入るに当たり、各ミッションが、経営する学校の整理統合を図った。②前年、廃校となった兄弟校である北陸学校（旧・愛真学校、北陸英和学校）の名前を受け継いだ。③文部省訓令第12号が発布され、公認学校として宗教教育を行なうことができなくなった。

『北陸学院百年史』p.135以下（以下、『百年史』）は、さらに以下を付け加える。④本校生徒が北陸一円から集まっており、「北陸」の名を冠することがふさわしい。⑤各種学校でありながら高等普通教育を施す女学校であるとの自負を込めつつ、名称変更を機に、生徒数の増加を図った。

実際には前年3月に金沢市高等女学校が開校し、各種学校となることを決意した金沢女学校が校名を改称することで混乱を避け、また北陸女学校がキリスト教教育を続ける承認を得ようしたと思われる。

一方、条約改正を受け、1902（明治35）年10月、金沢女学校不動産の所有権を在日本プレスビテリア

ン宣教師社団へ移転させた。これ以前にも実質的には同社団が金沢女学校を設立、創立者メリー・ヘッセルを初め外国人宣教師が学校を運営してきたが、設立者や校長は日本人とすることが求められてきた。これが変更され、北陸女学校は実態に即して外国人宣教師が設立者および校長となり、文字通りミッション・スクールとなった。

- 5) 1961（昭和36）年、柿木畠校地に建てられ、後、飛梅校地に移った胸像の碑文には、「(明治)3年1月3日、高知県土佐に生る」とある。一方『百年史』は「旧暦1月7日、高知県に生まれた」(p.205)としている。中澤の長男・耕一郎は「明治三年正月七日生まれなので、その正と七をとって、名前にされました」(北陸学院同窓会『おもかげ 校長 中澤正七先生』p.4、1961年)と書いている。また、三菱会社の技師であった父・喜久造、母・尾花の三男として、高知県長岡郡高須村149番地で生まれたとも伝えている。
- 6) 『八十年史』p.50は「金沢教会の名簿記載が不備で、どこで誰から受洗したか明白でない」と記している。
- 7) 中澤が赴任した教会と教師職について、『八十年史』p.50および『百年史』p.205は「麴町教会の主任」としている。飛梅校地の胸像の碑文には「東京麴町教会主任」とある。しかし当時の日本基督教会には「麴町教会」は存在しない。おそらく日本基督教会一番町教会のことと思われる。この教会は1887（明治20）年3月、植村正久により日本基督一致教会一番町教会として千代田区三番町5で始められた。同年末、麴町区一番町48に移転、会堂を建設して一番町教会となり、1890（明治23）年には日本基督教会一番町教会となった。1906（明治39）年に富士見町6-3に移転、日本基督教会富士見町教会となる。1941（昭和16）年の日本基督教団の結成以後、現在まで日本基督教団富士見町教会となっている。中澤が伝道者を務めた1896（明治29）年から1899（明治32）年当時は日本基督教会一番町教会であったが、麴町にあったため、麴町教会と呼ばれたらしい。しかしこの教会は創立当初から植村正久が牧師として長く牧会していた。中澤が同教会の「主任」とされる意味は不明である。中澤の長男・耕一郎は、「明治学院卒業後、植村先生の下で、副牧師として、伝道に従事」(前出、『おもかげ』p.7)したと書いている。「副牧師」とあるが、日本基督教会の教師規定に従えば、教師補と思われる。教師補は、神学校を卒業し、教師・

牧師となるべく教会で牧会・伝道経験を積みながら牧師検定試験に備えた。いわば牧師になるための準備過程にある信徒であって、だからこそ中澤は日本基督教会金沢教会の長老になることができたと考えられる。

- 8) 中澤が伝道者から教育者に転じた理由について、1937(昭和12)年3月20日発行の北陸女学校同窓会「会報」(以下、「会報」)27号p.47-48で、自分には音楽の才能がなく、左耳の鼓膜に不具合もあり、伝道者に向かなかつたと述べている。一方、恩師・植村正久は、中澤が伝道者として立つことを強く望み、何度となく北陸女学校辞任を勧めた。

北陸女学校に在職中、植村は少なくとも5回、金沢を訪れている(梅染信夫氏の調査による)。

- ①1903(明治36)年4月 日本基督教会伝道局長として。教会および北陸女学校にて講演。
  - ②1904(明治37)年3月 伝道集会講師として
  - ③1907(明治40)年10月 日本基督教会金沢教会創立25周年記念会および伝道集会講師として
  - ④1913(大正2)年9月 伝道集会講師として
  - ⑤1915(大正4)年5月 伝道集会講師として
- いずれの機会にも、中澤は日本基督教会金沢教会長老として、また北陸女学校主幹として植村に会っている。その度に植村から、牧師に復帰するよう説得されたようである。

中澤は「会報」27号p.47で次のように記している。おそらく③の折、植村から「女学校は誰かに任せて上京せよと勧められ…ルーサー校長に辞任を申出た。…後また出京の際、先生の御意向により、軽井沢避暑中のジョンストン校長にも、同様の事を申出たのであったが、その都度種々の事情で許されなかった。私は先生には再三当地を引揚げるやうな御返事をして置きながら本校の居心地好さに遂にまたズルズルになってしまった。」北陸女学校が中澤主幹の留任を強く望んだため、結局、中澤は辞任を断念する。後には校長となり、その死に至るまで務めを続けることになる。中澤は、本校の居心地の良さのためと語っている。しかし実際には北陸にキリスト教学校を形成することは重い務めであった。むしろ中澤の表現には、それを神から与えられた使命であるとする召命感が表れている。

中澤が神学部を卒業し、教会での伝道牧会を経験したことは、キリスト教学校としての北陸女学校の形成に大きな力となった。もともと生徒から「平和

ダコ」、また「おと」と渾名された温和で謙虚な人柄で、生徒を愛し、教職員を支えた。問題を起こした生徒に対しても温かく接し、辛抱強く論じ続けた(表3「学校日誌」1943.1.1～12.27および同・1944.1.1～11.10、前出『おもかげ』p.13)。同窓生にも愛情を注ぎ、内外各地の同窓会に出席した。出張の際にはその地の同窓生と会っている。関東大震災で死亡した長谷川豊子母子の葬儀では、慰め深い弔辞を述べた(「会報」16号p.6-7)。その姿は学校における牧会者そのものだった。また、東京専門学校で文学を学んだ経験は、演劇を始めとする学校での文化活動の指導に生かされた。シェイクスピアなど英国文学にも造詣があり、「犠牲」という女学校のクリスマス劇の戯曲を書いている(表2)。そして3年間の土浦中学校での教員経験により、教育現場、また学校運営の知識があった。中澤が得た神学、文学、教育学の素養は、学校形成に大いに役立ったと思われる。北陸女学校は得難い人材に恵まれた。それゆえ歴代外国人校長は中澤を信頼し、その留任を強く求めた。

- 9) 島崎恒五郎は中澤と同郷、土佐出身のキリスト者である。1933(昭和8)年11月20日発行の「会報」24号p.14によれば、中澤の推薦で、石川県立師範学校で教鞭をとっていた。当時、日本基督教会金沢教会の日曜学校副校長を務め、後に長老として教会を支えた。
- 10) 「会報」27号p.39
  - 11) ルーサーは1898(明治31)年に英和幼稚園に着任し、1901(明治34)年から園長に就任していた。
  - 12) 『八十年史』p.97
  - 13) 1921(大正10)年11月30日発行の「会報」14号p.10以下に歓迎会の報告と、中澤の校長就任挨拶の内容が掲載されている。
  - 14) 「中沢正七先生」1952(昭和27)年11月9日「北陸新聞」に掲載
  - 15) 「会報」17号p.2
  - 16) 同p.3
  - 17) 1914(大正3)年8月1日発行の「会報」8号p.16以下。『八十年史』p.87以下に所収
  - 18) 1926(昭和1)年12月25日発行「会報」14号p.12この挨拶では、盛大な歓迎ぶりに、生徒から「おと」と渾名されている自分が今日は婚宴の花婿のように喜び迎えられていることに驚き、感謝すると語って

いる。同時に、こんな不十分な者が校長になったのだから助けてやろうという職員生徒、同窓生の好意を感じると述べ、協力を求めた。一同が、中澤を温かく校長に迎え、祝福したことが伺われる。

- 19) 1927 (昭和2) 年12月発行「会報」19号 p.1-4
- 20) 同 p.2
- 21) 1935 (昭和10) 年12月25日発行「会報」26号 p.6-8 に所収.
- 22) この式辞で中澤はさらに「幸い本校は人種を超越し、異なる言語風習を忘れて相親める内外職員の一致協力により、幾分とても世界同胞主義の大義を校風の中に発揚し得ることは、本校関係者の一層反省自覚して努むべき所と信ずる」(同 p.7) と述べた。記念式典に駆け付けた米国長老教会の外国伝道局代表のデトワイラーと日本プレスビテリアン・ミッション代表ハナフォードに向け、信仰による一致と感謝の意を込めた。国家主義・排外主義が高まる当時、文部大臣の祝電が披露され、県知事、市長代理が祝辞を述べ、県教育会長、市会議長、県中学校校長代表、小学校校長代表が見守るなかで語られたこの式辞は、北陸女学校の方向性を鮮明に印象付けた。
- 23) 「会報」17号 p.3
- 24) 『北陸五十年史』(以下、『五十年史』) p.10
- 25) 『百年史』 p.16
- 26) 『五十年史』 p.33
- 27) 『五十年史』 p.333
- 28) 但し1935 (昭和10) 年8月に改訂された同窓会規則第3条は「本会ノ目的ハ会員相互ノ関係ヲ親密ナラシメ且ツ母校ノ発展ヲ図ルニアリ」(『五十年史』 p.342) と定めており、「基督教的教育」の文言が変更されている。これは、いわば本則とも言うべき財団法人寄附行為にキリスト教教育が明示されることになったためと考えられる。
- 29) 『五十年史』 p.58 但しここに掲載された(北陸女学校設立)「当時の学則」とあるものは、実は1900 (明治33) 年の北陸女学校設立当時のものではなく、1905 (明治38) 年に設置される音楽講習科設置条項(第4条)を含み、また1906 (明治39) 年に廃止された予備科の定めがない。北陸女学校設立後6年間の改正事項が反映されたものとなっている。『百年史』 p.137-138
- 30) 1937 (昭和12) 年3月20日発行「会報」27号 p.5
- 31) 『五十年史』 p.367

32) 『五十年史』 p.372

33) 中澤自身、金沢女学校に赴任した1902 (明治35) 年の6月に日本基督教会金沢教会の長老となり、以後、生涯にわたり教会に仕えた。同教会の主日の礼拝で説教奉仕を何度も行っている。教会への奉仕は同教会だけではなく、日本基督教会殿町教会や同・高岡教会、同・小松伝道教会にも、さらには日本メソジスト金沢教会や同・野町教会など、地域諸教会にまで及んだ。その詳細な説教原稿メモが多く残されている(表3参照)。また北陸女学校附属幼稚園、富山市の同・第一幼稚園、高岡市の同・第二幼稚園の他、金沢市内の幼稚園でも、母の会で聖書を説いた。中澤は、恩師・植村正久が望んだように特定の教会の担任教師となることはなかったが、北陸女学校にあって北陸諸教会の伝道を支えた。教会の牧師ではなく、諸教会の牧師であった。